

ティー

ネット

T・NET通信

2001 SPRING

No. 18

発行

財団法人 日本ユニセフ協会 学校事業部

〒163-8688 東京都新宿区大京町31-10 ユニセフハウス TEL:03-3355-3224 FAX:03-3355-3472

ホームページ <http://www.unicef.or.jp> 募金口座 郵便振替・00190-5-31000・日本ユニセフ協会

新しい教育への 取り組み

世界各国の
先生の声から

来年度以降、日本では新しい学習指導要領に基づき、学校での教育スタイルが変わろうとしています。特に従来の教科教育では取り上げられにくかった体験型・参加型の活動を重視する「総合的な学習の時間」の導入にも大きな注目が集まっています。

ユニセフは、教育は子どもの権利であり、かつ基本的ニーズであることを訴え、すべての子どもたちが質の高い教育を受けられることを目標に活動していま

す。そして、「子どもの権利条約」が定めているように、教育は、子どもの能力を十分に伸ばし、人権や多様性の尊重、相互理解、平和、寛容、平等、環境保護などの精神を培うものでなければならないと考えています。

今、日本だけでなく世界各国でこうした考え方に基づく新しい教育への取り組みがはじまっています。今回は、そのようすと、現地の先生方の声をお届けいたします。

『総合的な学習の時間』
とユニセフ 学校における
ユニセフ活用ガイド』

発行!

学校においてユニセフの素材はどのように活用できるのでしょうか? ユニセフを活用して設定可能な学習テーマや、各テーマに基づく活動展開例、実践事例などを多数掲載しました。



冊子ご希望の方は...学校事業部へ



バングラデシュ 多角的教授・学習法

初等教育の就学率に加え、中途退学も大きな課題となっているバングラデシュでは、少なくとも小学校の5年間は子どもが自分から学校を離れていくことがないような学校づくりが求められています。楽しくかつ十分に基礎教科を学習できるように、というニーズに応えているのが、MI理論*に基づいた多角的教授・学習法【Multiple Ways of Teaching and Learning: MWTL】と呼ばれるアプローチです。

マイメンシン県のカンチジュリー小学校で先生をしているシーカ・チャングダさんは、MWTLアプローチの研修を受け、6歳から10歳の子どもたちを相手に新しい授業をはじめました。

「教師が話しつづけて、おうむのように繰り返させるだけの授業では、すぐにあきてしまいます。今は、歌う、踊る、演技するなどの活動を取り入れながら教えています。子どもたちはすぐに集中し、学習の手応えも感じられます。」

新しい授業をはじめてから、出席率が次第に上

がってきました。子どもたち自身が「学校に行こう」と熱心になっているのです。

読み書きのできない環境からやってくる子どもたちは学校に対して何の準備もありません。従来の教科学習を突然はじめられたら、まったくついてこれなくなってしまう。



©UNICEF

「わたしの授業は、たとえばこんなふうにはじめます。鳥の絵を見せるとしましょう。絵をよく見た後、子どもたちをグループにわけ、今見た絵について話し合います。絵と関連した歌を歌ってみせ、一緒に歌ったり、鳥に関するお話をつくってそれを演じてみせたり、子どもたちに鳥の動きをまねさせてみたりもします。

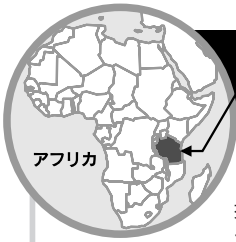
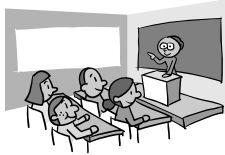
その後、小黒板とチョークを渡して質問タイムです。鳥はどんな色をしていたかな? 鳥は何をしていたらう? そのうちに探究するような質問もまじえます。鳥は何を食べるのかな? どうやって飛ぶんだらう? どのように巣をつくるのかな? ... そうしてだんだんと教科学習の中へと引き込んでゆくのです。」



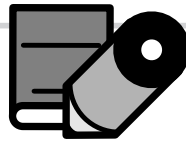
子どもたちは黒板に何かを書いてみるのが大好きです。だから、教室の壁の下半分は黒く塗られ、子どもたちが自由にチョークで字や絵をかけるように工夫されています。

参加型活動をベースにした授業をおこなってみてシーカさんは、子どもたちが自分で何かを思いついたり、興味を持ちたりすると、学習が早くなると実感しています。しかし、多くの教材をさがしたり、新しい歌や踊りをつくったりすることは大きな負担です。それでもシーカさんは「私たちはいかにおもしろく、これまでと違った授業ができるかを考えなければなりません」と話します。ただでさえ学校をやめざるを得ない状況が子どもたちを取り囲んでいる中、せめて学校を子どもにやさしい、子どもが本当に学べる空間にするための取り組みが広がっています。

*注)MI理論(multiple intelligence) 人間は、ものごとの認知や学習を通じて少なくとも7つの知能がはたらく、とするガードナー博士(ハーバード大学)の説。7つの知能とは、1言語(verbal/linguistic) 2論理・数学(logical/mathematical) 3視覚・空間(visual/spatial) 4音楽・リズム(musical/rhythmic) 5身体・運動(body/kinaesthetic) 6対人関係(interpersonal) 7自己内省(intrapersonal)



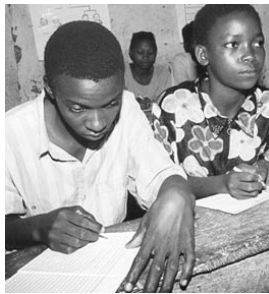
タンザニア 学校外教育COBETの成功



300万人もの未就学児童を抱えるタンザニアでは、すべての子どもに基礎教育の機会を保障するために、COBET(Complementary Basic Education in Tanzania 補完的基礎教育)と呼ばれるプログラムがはじまっています。

タンザニア教育文化省がユニセフの支援のもとで進めているCOBETは、学校外教育の場です。その特徴は従来の正規の教育では不十分だった部分を補い、子どもたちが通いやすい柔軟な教育の仕組みであるという点です。

COBETの主役は地域社会です。COBETのカリキュラムや時間割、設置場所などの決定に住民が参画しています。COBETは正規の学校より授業時間が短く、体罰をしないこと、無料であること、



©UNICEF

子どもにやさしい参加型の学習手法を取ることを原則としています。学習内容は主に次の5点を重視し、自立のために必要な力を得られるように

考えられています。Aコミュニケーション(スワヒリ語と英語)、B算数(数学)、C一般知識、職業上の技術、E生活に必要な能力など資質の向上 子どもたちは8~13歳と14~18歳の年齢ごとのグループにわけられています。COBETで3年間の教育を終えた低年齢組の子どもたちは正規の学校に編入できます。また、14~18歳の子どもたちには職業訓練や中等教育を続ける道が残されています。

指導員としてンボンデのCOBETセンターで働くラシド・チュア・チュアさんは、こう話します。

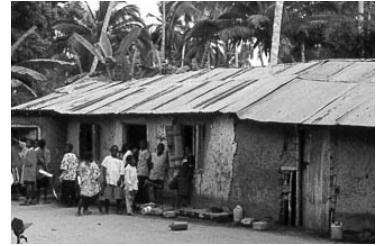


©UNICEF

「正規の小学校で教員をやっていた頃は、教育システムから外れた子どもたちをどう扱えばよいのかわかりませんでした。COBETにやってくる子どもたちは、長い間教育から離れていて、盗みなどの悪癖があったり、麻薬をやっていたりさまざまです。でもCOBETの指導員になって、ここで子どもたちをうまく学習に参加させながら教える手法を身につけることができました。

COBETに通うのに費用はかからず、制服もありません。だから、貧しい家庭の子どもや、親のない子どもも通うことができます。

また、地域社会がCOBETに参画していることが、子どもたちの学びやすい環境をつくることに



©UNICEF ナンゴセ地区のCOBETセンター



©UNICEF

大きく貢献しています。子どもに教育を受けさせることの効果も直接わかるので、住民は教育の重要性について認識するようにもなります。

今後必要とされるのは、指導員の訓練です。特に職業訓練のできる指導員を育てなければなりません。COBETを出た後も、子どもが自分の力で生きていけるだけの能力を身に付けられるようにすることが大切です。」



マケドニア 障害のある子どもを包含する教育



ディモ・ハッジ・ディモフ 小学校では、「障害のある子どもを普通教育に包含するためのプロジェクト」が実施されています。カティカ・デュコフスカ・ムラトフスカさんは、障害のある子どもを普通学級へ統合することに成功した先生のひとりです。



「わたしのクラスでは、インタラクティブ(双方向)学習をおこなってきました。知識レベルによって子どもたちを小ユニットに分け、子どもたちはユニットごとに与えられる課題に取り組みます。個々に適した課題について最大限の成果をあげられるようにするのは、重要なことは、誰も学習の中で孤立しないことです。早く課題が終わった子どもは、友達の学習を手伝います。教師の役割は、子どもたちがみな平等であると感じられる雰囲気をつくることです。

こうした学習手法は非常に個別化されたものですが、障害のある子どもを受け入れるには適しています。わたしはクラスの4人の児童に読み書き、たし算引き算を教えることができました。これは、中・重度の障害のある子どもにとっては大きな成功です。

両親の理解を得ることも重要でした。「なぜうちの子がその子の隣に座らなくてはならないのか?」「授業の邪魔なのでは?」という声があがったり、保護者会で子どもの障害について説明するよう求められました。わたしは、子どもはみなそれぞれ問題があるものだから、と説明しませんでした。その後、クラスは完璧に機能し、障害のある子どもはもっとも愛される存在となっています。親は、自分の子どもが障害のある子どもを受け入れているということを認識すると、自分たちも同じように助け合おうとするものです。

このプロジェクトは、障害のある子どもたちの存在を生活の一部とし、互いに人間関係を築くことを可能にしています。それは、現在過渡期にあるマケドニアという国にとっても大切なことだと思えます。」

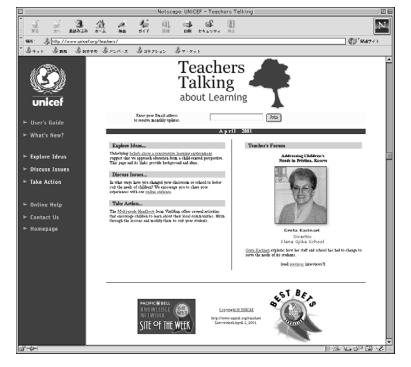


©UNICEF

Teachers Talking

about Learning
(<http://www.unicef.org/teachers>)

ユニセフ本部のホームページ内にあるこのサイトでは、今回取りあげているインタビュー記事のほか、世界各国の教育現場からの声や、新しい教育手法などについて多くの情報を提供しています。教員対象の掲示板などもあり、いろいろな国の先生方と意見交換できる場にもなっています。



ここで紹介した各国の記事は、ユニセフ本部ホームページ Teachers Talking about Learning より日本ユニセフ協会編集